Alphonse Mucha Museum News

堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）

アルフォンス・ミュシャ
《月桂樹》
1901年
リトグラフ、紙

Contents

vol. 7

展示報告（2017年7月−2018年3月）
作品紹介
作品修復報告
イベントレポート
ミュシャ館インフォメーション

あこがれ アルフォンス・ミュシャに魅せられた人々
2017年7月1日（土）－2017年11月5日（日）

ポスターや装飾パネルなどに見出されるアルフォンス・ミュシャの独自性はいわゆる「ミュシャ・スタイル」とよばれ、ひとつの流行として19世紀末のパリでは追随者や模倣作品を生み出すことになりました。ミュシャのデザイナーとしての成功は稀代の女優サラ・ベルナールによって見出されただけでなく、同時代の作家たちによって支持され、模倣されたことも理由のひとつでしょう。

一方、明治期の日本でもミュシャの作品はほぼリアルタイムで知られていました。特に広く知られるようになったのはミュシャの作品が挿絵として文芸雑誌『明星』に掲載されたことがきっかけです。また一部の『明星』の表紙にはミュシャの描く作品の影響を見ることもできます。そして、ミュシャの一大コレクションを築いた土居君雄氏もミュシャを見出し、また魅了された一人です。本展覧会では女優サラ・ベルナールや同時代の追随者、また明治期の日本、特に『明星』誌上にてミュシャが受容された様子を合わせて約80点の作品と共に紹介しました。

第1章ではミュシャがポスターデザイナーとして一躍有名になるきっかけをつくったフランスの国民的女優サラ・ベルナールに関連する作品をご覧いただきました。ミュシャとベルナールの「運命的な出会い」の話はベル・エポックの伝説のひとつとしてあまりにも有名です。ミュシャはベルナールをきっかけに世間に広く認知され、またその後も彼女自身が主演をつとめるポスターの依頼主として重要な関係を築いていきました。《ジスモンダ》の成功により、ベルナールはミュシャと6年間の専属契約を結び、ポスターはもちろん、舞台装飾や衣装のデザインも依頼しています。ミュシャ自身がこの後、多岐にわたってデザイナーとしての手腕を発揮させていくことをベルナールはいち早く見出していたのでしょう。

第2章では、主にミュシャがパリで活躍した際に制作された作品とともに同時代にパリで活動していたポスター画家の作品を合わせてご紹介しました。ミュシャがパリで制作した約10年間のデザイン様式は一般的に「ミュシャ・スタイル」と呼ばれています。遅くとも1900年頃には人々の間で定着し、アール・ヌーヴォーの指針として高く評価され、19世紀末のパリで広く流行しました。安定感のある構図や淡い色彩、写実的な人物表現、緻密な装飾文様などの特徴を持つミュシャのポスターはたちまち人々を惹きつけました。「ミュシャ・スタイル」として多くの追随者、模倣者を生むこととともなった彼の画風は、アール・ヌーヴォーという芸術様式のなかで受容されていきました。

第3章では、「ミュシャと日本人」という視点からミュシャの作品と日本とのつながり、そして、ミュシャの作品の一大コレクションを築き、堺市にそのコレクションを寄贈された土居君雄氏についてもご紹介しました。与謝野晶子が活躍した美術文芸誌『明星』が創刊された1900年の9月に刊行された第6号には初めて挿絵にミュシャの作品が登場します。ミュシャのポスター作品はすでに日本に紹介されてはいましたが、広く一般に普及するようになったのは『明星』の挿絵からでした。日本人とミュシャ作品の出会いは、すなわちアール・ヌーヴォーとの出会いであり、藤島武二や杉浦非水はこの芸術思想を糸口に、自らの方向性を模索しました。

一方、「カメラのドイ」で知られる株式会社ドイの創業者 、土居君雄氏は、現在堺市所蔵のミュシャの作品の体系的なコレクションを築いたコレクターとしても知られています。土居氏の約30年におよぶ収集活動によって、ドイ・コレクションは、作品総数約500点というミュシャのコレクションとしては質、量ともに世界有数のものとなりました。(N.N.)

国立新美術館「ミュシャ展」
2017年3月8日（水）―2017年6月5日（月）

国立新美術館開館10周年・チェコ文化年事業「ミュシャ展」が東京の国立新美術館で開催されました。本展はミュシャの画業後期の大作《スラヴ叙事詩》全20作品が初めてチェコ国外で公開された展覧会となりました。全展示作品数80点中、当館からは38点の作品を出品しました。特に《スラヴ叙事詩》の展示に続くパリ時代の作品を中心とした章「ミュシャとアール・ヌーヴォー」において、ミュシャ

図案のすすめ ミュシャとデザイン

2017年11月11日(土)—2018年3月11日(日)

アール・ヌーヴォーが頂点を迎えていた1900年の第5回パリ万国博覧会においてアルフォンス・ミュシャは多数の国や企業からパヴィリオンの内部装飾などを任され、デザイナーとしての手腕を発揮していました。万博を通じて装飾、デザインの分野でも地位を確立したミュシャは『装飾資料集』に自らの装飾デザインを収録し、アイデアの集大成を人々に公開します。『装飾資料集』は宝飾品や食器類などのデザインのほかに装飾的に描かれた模様や植物の詳細なスケッチなどが混在したまさにミュシャの知識や経験、そして想像力が集約された見本帳でした。

一方、パリ万国博覧会を機に渡欧していた日本の美術家たちの中で、洋画家の浅井忠は図案の重要性に気づき帰国後は、京都高等工芸学校に設立された図案科に教授として赴任し、図案教育を指導します。同校では教材としてミュシャの『装飾資料集』も活用されていました。

本展覧会ではミュシャの『装飾資料集』と共に、浅井忠の図案やまた京都高等工芸学校で展開された図案教育をご紹介しました。

第1章では、1900年のパリ万国博覧会にあわせてミュシャが制作した作品とそれに関連する作品をご覧いただきました。19世紀最後の第5回パリ万国博覧会は展示規模そして観客動員数で最大のものでした。入場者数は当時のパリの人口を大きく超える5000万人以上を報告する記録もあり、まさにそれまでパリを中心に展開されてきたヨーロッパの万博展示を集大成したものであったと考えられます。ミュシャはこの万博を通して様々な仕事を請け負いました。パヴィリオンの装飾、宝飾店フーケのデザイン、万博のためのポスターの制作、さらにはサラ・ベルナールのためのポスターのほかに多数の装飾パネル、カレンダー、本の挿絵を出品しました。ミュシャがこの万博のためにおこなった膨大な仕事量が垣間見えます。

第2章ではパリ万博をきっかけに渡欧し、アール・ヌーヴォーに刺激を受けた洋画家の浅井忠を中心にご紹介しました。パリ留学中は、アール・ヌーヴォーの発展に貢献したサミュエル・ビングとも親交があった浅井ですが、京都高等工芸学校設立準備のためにパリに視察に訪れていた中澤岩太との出会いをきっかけに浅井は帰国後京都に移り住み、図案科の教授として図案などの授業を担当します。興味深いことに図案科ではミュシャの『装飾資料集』を教材として使用していました。展示ではそこで学ぶ生徒の模写作品、また同科でおこなわれていた図案教育について生徒作品をご覧いただき、あわせて同じく教材として使用されていたウジェーヌ・グラッセなどミュシャと同時代に出版されたデザイン集も展示しました。

第3章は、図案の展開としての浅井の学外での活動をご紹介し、また日本のアール・ヌーヴォーを書籍の装幀からご覧いただきました。授業を担当するかたわら、浅井は京都の工芸家や漆芸家と共同で図案の研究団体「遊陶園」、(1903年)「京漆園」(1906年)を設立して、清水六兵衛や杉林古香などの陶芸家や漆芸家に図案を提供し、工芸家たちと共同で作品を制作しました。また、図案の研究会である小美術会の機関誌『小美術』に掲載された図案に関する論評も行っています。こうした活動から、浅井の京都での重要な仕事の位置づけとして、図案制作および図案の指導があったことがうかがえます。一方、パリ万博を機に渡欧した日本の美術家たちがヨーロッパ土産として持ち帰ったポスターや様々な印刷物を通して、あるいは輸入した雑誌や図案集などを通してアール・ヌーヴォーが当時の日本の美術家たちにもほぼ同時代的に影響を及ぼしていました。そのことは、例えば『明星』や『中学世界』など当時の刊行物の表紙からミュシャ作品の影響もうかがうことができます。(N.N.)

のパリ時代を代表する作品であるサラ・ベルナールの演劇ポスター、また四つの花シリーズや《黄道十二宮》といった華やかな装飾パネルなどを多くのお客様にご覧頂きました。この他にも《ハーモニー》や《ウミロフ・ミラー》といった大型油彩作品、《蛇のブレスレットと指輪》など、堺以外では見ることができない作品の数々を展示しました。またミュシャがチェコに帰国した後に描いた祖国のためのポスター作品も出品しました。これら堺のコレクションにプラハ市立美術館や個人コレクションも加わり、本展は《スラヴ叙事詩》を中心として、ミュシャの初期パリ時代から後期チェコ時代にかけての多彩な作品が一挙に公開された貴重な展覧会となりました。(Y.K.)

堺市はミュシャと周辺画家の作品約500点を所蔵しています。企画展で展示された作品や人気作品などをピックアップしてご紹介します。

《サロン・デ・サン:ミュシャ作品展》

1897年 リトグラフ、紙
655×455mm

本作は1897年にパリで行われたミュシャの2回目の個展のためのポスターである。1回目の個展は同年2月に開催されたが、2回目と比べると小規模なものだった。『ラ・プリュム』誌はミュシャの個展を記念して100頁に及ぶミュシャ特集号を発行し、ミュシャの芸術活動を回顧する記事を掲載した。展覧会では素描、デザイン画、版画作品、挿絵やその原画、肖像画など計448点のミュシャの作品が展示され、このうちの多くの作品は後にプラハやウィーン、ボヘミアでも展示された。

作品の上部の帯には展覧会名「サロン・デ・サン」の飾り文字が描かれ、少女はミュシャの故郷であるモラヴィア風のヒナギクの冠、そしてチェコの民族衣装に使われる模様が描かれた布を頭に被っている。髪はミュシャがよく用いる装飾的な曲線で表され、左手には筆、そしてハートと3つの円を描いた白いキャンヴァスを持っている。スラブの衣装を身につけた少女からは、ミュシャの祖国に対する思い入れが伺える。(Y.K.)

《ハムレット》

1899年 リトグラフ、紙
2079×755mm

ミュシャがパリでポスター画家として一躍有名になったのは、女優サラ・ベルナールの演劇ポスターの注文を受けたことがきっかけだった。ミュシャのポスターを気に入ったサラはミュシャと契約を結び、ミュシャは1895年から6年間サラのポスターを次々と制作した。本作はミュシャが手がけた最後のサラの演劇ポスターである。

「ハムレット」はシェイクスピアの四大悲劇の一つで、サラが主人公ハムレット演じたこの公演は、フランスにおける初めての本格的なハムレットの上演だった。デンマークの王子ハムレットが、父王を殺して王位を奪った叔父に復讐するが、最終的には王子自身も死ぬという悲劇の物語である。ハムレットの背後の半円の中には父王の亡霊が、また下部にはハムレットの恋人オフィーリアの亡骸が死の世界をイメージした青色で描かれている。死の世界を背景にして、剣をお守りのように胸にしっかり抱えて立つハムレットの姿からは、彼に襲いかかる運命に対する決意と孤独感が伝わってくる。(Y.K.)

《装飾資料集》

1902年 書籍
470×343×35mm

《装飾資料集》は72枚の図版から構成され、その内容は、女性の様々なポーズや素描、植物の精確なデッサンと様式化されたデザイン、これらの装飾への応用例、人体のポーズと動植物模様、曲線を組み合わせた宝飾品や食器、室内装飾用のオブジェのデザインなどが含まれる。本作は画集としてよりも、各図版に分割して利用することを目的としたと考えられており、デザインを仕事にする人や学ぶ人が見本として参照するのに便利な形状になっている。

本作を出版したリブレール・サントラル・デ・ボザール社は、ヨーロッパ中の学校や図書館に本作を販売し、多くの図版が日用品、家具、宝石、活字、織物、カーテン、壁紙などのためのデザインとして用いられた。

装飾の基本的なデザインを集大成して出版することは、全ての日常品に芸術的に優れたデザインを用いることを目指すアール・ヌーヴォーの芸術家のデザイン観をよく示している。(Y.K.)

作品修復報告

2017年度

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
《愛人たち》	1895年	リトグラフ、紙	1053×1373	表打ち、裏打ちの除去、全体水洗、全体脱酸、再裏打ち、補彩、額・マット及び裏板新調など	山領絵画修復工房
《リュション〈下絵〉》 《リュション》	1895年 1896年	水彩、紙 リトグラフ、紙	553× 396 1033×720	裏打ちの除去、本紙の接合、再裏打ち、ブックマット・裏板新調など／表打ち、裏打ちの除去、全体水洗、本紙の補強、補彩、マット及び裏板新調など	山領絵画修復工房
蛇のブレスレットと指輪	1899年	金、エナメル、オパール、ダイヤモンド	275×56	先端部分パーツの取り外し、接着剤の除去、パーツの接合、先端部分パーツの取り付け、チェーンのよじれ解消	森絵画保存修復工房

※作品寸法の単位はmm。

当館ではワークショップや講演会など企画展に関連した多彩なイベントを開催しています。2017年度はこのようなイベントを開催しました。

“あこがれ展 記念コンサート”

2017年7月1日(土)14:00~15:30

企画展「あこがれ アルフォンス･ミュシャに魅せられた人々」開催を記念してコンサートをおこないました。堺を代表する新進気鋭のアーティスト、長良令子さん、窪田香織さん、小西優子さんをお迎えし、ミュシャやチェコゆかりの楽曲を演奏頂きました。コンサート最後に演奏されたスメタナの『わが祖国』では、会場の皆様と一緒に合唱し、盛況のうちに幕を閉じました。

ワークショップ “やってみよう✡ピンホールカメラに挑戦!”

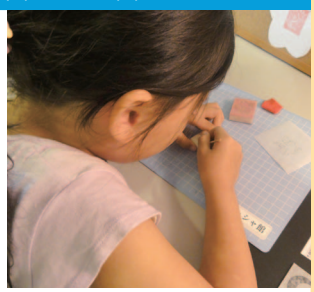
2017年7月23日(日) ／10月1日(日)　各日10:00~13:00

「ピンホールカメラ」を手作りし、野外での撮影と暗室での現像・焼き付けまでを実施しました。「ピンホールカメラ」とは、レンズを使わず針穴で像を写し出す簡単な構造のカメラで、どこかノスタルジックな写真が出来上がります。微妙な光の量の変化で仕上がりが大きく変わるワークショップでしたが、回を重ねるうちに上達した参加者の方々は、楽しみながらカメラ作りと撮影体験を行いました。

ワークショップ “作ってたのしい! 消しゴムはんこ”

2017年9月24日(日)／10月8日(日) 各日10:00~17:15

版画の種類の一つである「凸版」を体験できる消しゴムはんこを作るワークショップを実施しました。親子連れの方々をはじめ、大人から子どもまで非常にたくさんの方にご参加いただきました。専用の消しゴムにつまようじで絵柄を彫って参加者の個性溢れるオリジナルスタンプがたくさん出来上がりました。



ワークショップ “ミュシャのデザインでカードをつくろう”

2017年8月13日(日)/8月27日(日) 各日10:00~17:15
2017年7月30日(日) 第9回堺アート･ワールド2017（堺市産業振興センター）

ミュシャの作品から人物や装飾のパーツを取り出したシールを組み合わせて、オリジナルのグリーティングカードを作りました。着せ替えごっこのように自由な組み合わせができるので、小さなお子様から大人の方々まで幅広く楽しんで頂けました。

“チェコアニメ鑑賞会”

2017年12月9日(土)/2018年2月17日(土) 各日13:00~15:00

ミュシャの故郷チェコは早くから国をあげてアニメ制作がさかんにおこなわれてきました。ミュシャの故郷チェコのアニメを通じてチェコの文化、そしてミュシャに親しんでもらう鑑賞会をおこないました。

写真展 “やってみよう✡ピンホールカメラに挑戦!”

2017年11月18日(土)~12月17日(日)

7月と10月に開催したワークショップ「やってみよう✡ピンホールカメラに挑戦！」で参加者の皆様が撮影した写真を展示して、写真展を開催しました。展示会場ではピンホールカメラの仕組みと作り方もご紹介しながら、来館者の皆様にミュシャの作品だけではなく、写真の鑑賞も楽しんで頂きました。

ワークショップ “シルクスクリーンに挑戦!”

2018年1月21日(日) 10:00~12:00

ミュシャのポスターはリトグラフ（石版画）という版画手法で作られています。ワークショップでは、版画技法のミニレクチャーの後、シルクスクリーンでミュシャの作品のモチーフを使ったグリーティングカードを作りました。参加者の皆様には体験を通じてミュシャのデザインを身近に感じて頂きながら、印刷技法にも興味を持って頂けたイベントになりました。

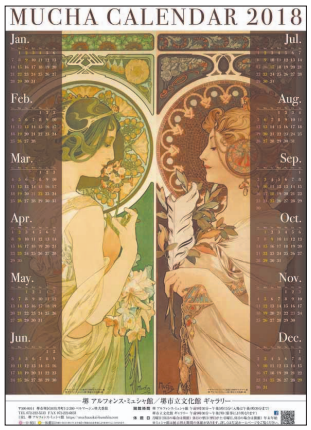
講演会 “京都高等工芸学校初期のデザイン教育”

2018年2月4日(日) 14:00~15:30
講師:並木誠士氏（京都工芸繊維大学･美術工芸資料館館長）

明治時代に渡欧した浅井忠たち日本人がアール・ヌーヴォーの作品を見て、京都の図案教育に及ぼした影響についてお話して頂きました。講師の並木誠士先生は日本でアール・ヌーヴォーが受容された様子をわかりやすく説明して下さり、普段とは異なった視点から見たミュシャの作品の魅力を発見する実りの多い場となりました。

堺アルフォンス・ミュシャ館は2017年2月6日～6月30日まで空調等の設備改修工事のため休館いたしおりましたが、2017年7月1日より、開館致しました。今後とも多くの方のご来館をお待ちしております。

先着プレゼント



ミュシャ館のFacebookページをシェアして頂いた方の中から先着で、ミュシャ館のオリジナルグッズをプレゼント致しました。2017年7月はオリジナルバッジを先着100名様に、2018年1月にはオリジナルカレンダーを先着90名様にプレゼントしました。次回のプレゼント企画も当館のFacebookでお知らせする予定です。お楽しみにお待ちください。

ミュシャ作品のレプリカ展示（大阪府立近つ飛鳥博物館）

2017年8月31日～2017年10月4日の期間、大阪府立近つ飛鳥博物館、近つ飛鳥ギャラリーにてミュシャの複製作品の展示を行いました。ミュシャの装飾パネルを中心としたレプリカ15点と館紹介や堺のミュシャコレクションの由来などをパネルで紹介しました。博物館の来館者の中には、ミュシャ館を初めて知ったという方もいて、より多くの方々にミュシャと堺を知って頂く機会となりました。

フォトコーナー

2018年3月より当館3階展示室横にフォトスポットを増設しました。等身大のミュシャが描いた優雅な女性たちと一緒に記念撮影ができるようになりました。ご来館の記念に是非お立ち寄りください。

鑑賞教育

2015年度から堺市では美術鑑賞プログラム「わくわくびじゅつかん」を実施しています。2017年度は、堺市立三国丘小学校の児童約120人と一緒にミュシャの作品を鑑賞しました。いくつかのグループに分かれ、それぞれ作品の感想や自分が発見したことを話し合いました。他の人が気づかないような作品の特徴やストーリーを想像した児童もいて、新しい作品の見方を経験できた良い機会となりました。

堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円

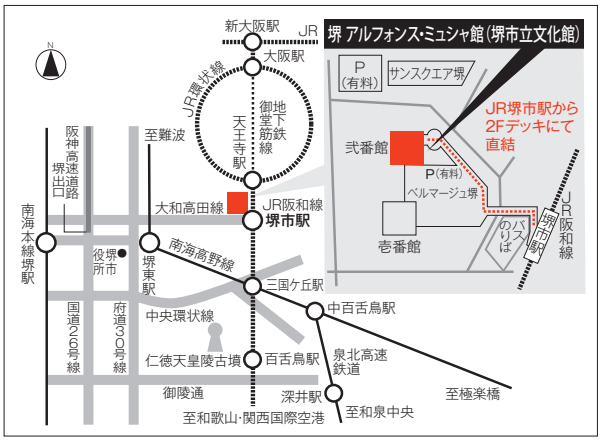
＊小学生未満・65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方と介助者は無料
＊20人以上100人未満の団体は2割引

公式Facebookページ 好評更新中!

開館時間　9時30分—17時15分（入館は16時30分まで）

休館日　月曜日（休日の場合は開館）、休日の翌日（翌日が土・日・休日の場合は開館）
年末年始、展示替期間

交通　JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪から約27分・天王寺から約8分・和歌山から約62分・関西国際空港から約41分



590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館
TEL:072-222-5533　FAX:072-222-6833
http://mucha.sakai-bunshin.com

発行日＝2018年5月31日　発行＝堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）　執筆＝西川奈津美(N.N.)、川口裕加子(Y.K.)　印刷＝株式会社 松岡印刷所